



愛知工業大学
愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学名電高校
愛知工業大学附属中学校

目次:

遺族ら招き法要	2
テクノフェア開く	3
東南大から代表団	4
世界 Jr. 卓球で金	5
愛名会講演会	6
あいぼう会表彰	7
花まちプロジェクト	8

発行所
名古屋電気学園
〒470-0392
豊田市八草町八千草 1247
TEL (0565) 48-8177

学園創立百四周年を祝う

永年勤続者
十九人を表彰

名古屋電気学園の創立百四周年記念式典が十一月八日、若水キャンパス淳和記念館三階記念ホールで、学園関係者、来賓合わせて百五十人が出席して開かれました。



永年勤続表彰を受け、後藤理事長を囲んで記念撮影する皆さん



式辞を述べる後藤泰之理事長

高校吹奏楽部の伴奏で国歌斉唱の後、後藤泰之理事長が「学園が培ってきた『ものづくりを通しての人づくりの精神』で、さらに発展を続けられるように」と式辞を述べ、四十五年、三十五年、二十五年、十五年の永年勤続者合わせて十九人を表彰しました。受賞者を代表し、大学工学部機械学科の渡辺修教授が「学園が飛躍的な発展を遂げた時代、教育、研究に携わることができたのは、この上ない幸せでした」と謝辞を述べました。2面に謝辞ほか。

世界ジュニア卓球で松山、木造選手が金メダル 5面

「ものづくりを通しての人づくり」を

朝晩の冷え込みが日に日に厳しく、冬の到来ももう間近となっています。十一月十三日が名古屋電気学園の創立記念日です。大正元年（一九一二年）、名古屋電気講習所としてスタートを切り、大正、昭和、そして平成と、学校にとつて厳しい時代、また大きく発展した時代を経て、現在の愛知工業大学を中心とした高校、中学、専門学校一体となって大きく発展してまいりました。本日、永年勤続表彰を受けられる方々が、それぞれの時代に対応して学園設置校のために大いに力を発揮され、その集大成が現在の姿なのだと思います。今、私学はこれまでにない厳しい状況に取り巻かれています。一番の原因は少子化にあります。大学では二〇一八年問題が言われていますが、すでに中学校、高校ではその影響が表れています。

そういった中、時代をいかに乗り越え、学園をますます充実・発展させていけばいいか。それにはやはり、これまで培ってきた「ものづくりを通しての人づくり」を中心に置かなければなりません。本学は電気学講習所としてスタートし、技術者の養成に取り組んでまいりました。これまで貫いてきた「ものづくりを通しての人づくり」という精神を、さらに発展・充実させて継続していく必要があります。

後藤泰之理事長の式辞

現在、大学を中心に、専門学校、高校の専門学科と、ものづくりを中心とした教育でつながっています。それだけでなく中学と高校の普通科でも、同じ精神の下、ものづくり、自然科学に興味のある子どもたちを育ててほしいと思います。それが名古屋電気学園の使命であると考えます。

皆様方には、一致団結して一つの方向に力を合わせ、厳しい時代を乗り越えていくことを、ぜひお願いしたいと思います。

本日は永年勤続の方々にあらためて感謝を申し上げるとともに、これからも学園に対するご尽力をお願い申し上げます。典の挨拶いたします。おめでとうございます。

「発展の時代を生きた」
渡辺修教授の謝辞



ただ今、永年勤続表彰をいただき、誠にありがとうございました。一同を代表してお礼を申し上げます。この四十五年勤続の節目を迎えるということは、これまで他人事かと思っておりましたが、過ぎてみればあつという間、時間のたつ早さを実感いたしました。

は、旧の一号館と、学生寮の二棟のみでございました。道もまだ舗装されておらず、雨の日などは大変でございました。体育の授業では運動場の端に一列に並び、小石を拾いながら、端から端まで歩いたということとを、よく覚えております。以来五十年、大学はその施設、陣容とも飛躍的な発展を遂げました。また高校、中学、専門学校もしかりであります。このような時を学園の一員として、学生の教育、研究に携わることができたのは、この上ない幸せでありました。このようにできたのも、総長先生、理事長先生をはじめ、学園の皆様方のおかげと心から感謝いたしております。このような思いは、きょう表彰をいただきました私たちが一同、その職や職場、また年数によって経験したこととは異なりますが、みな同じように感じているところであるとと思います。今後この気持ちを持ちまして、学園の一層の発展に尽くすよう努めてまいりたいと思っております。本日は大変ありがとうございました。

〔勤続四十五年〕 三人

渡辺 修
奥村 哲夫
松本壮一郎

〔勤続三十五年〕 一人

倉野 光生

〔勤続二十五年〕 四人

板倉 将昭
西浦 禎人
山田 行政
竹内 美佳

永年勤続表彰の皆さん

〔勤続十五年〕 十一人

江口 一彦
小西たつ美
小島 勉
高野 道広
山崎俊一郎
橋本 秀則
前田 賢
後藤 珠水
栗山 里夏
篠原 幸男
高木美也子

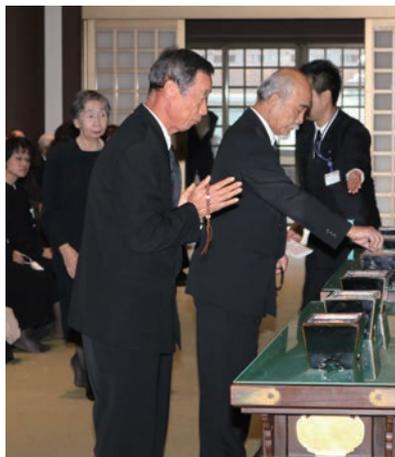
物故者しのび二十八年度法要



先頭に立ち焼香に向かう
後藤泰之理事長

創立記念式典に続いて、会場を覚王山日泰寺に移して学園の物故者法要がしめやかに営まれました。今年度に亡くなられた十三人の方々を含む物故者のご遺族が招かれたほか、祭主の後藤泰之理事長をはじめ学園関係者や学生・生徒を合わせて三百二十人が参列しました。

読経が流れる中、後藤理事長を先頭に焼香の列が続き、物故者の冥福を祈りました。最後に後藤理事長が「先人の方々のご努力を無にすることのないよう、これからも教職員一同、力を合わせて学園を発展させてまいります」と祭主挨拶を述べました。



焼香するご遺族の皆さん

テクノフェア2016

本学が持つ研究ポテンシャルを一堂に集めて公開する「愛工大テクノフェア2016」が十一月十八日、八草キャンパス一号館を会場に繰り広げられました。

テクノフェアは産業界・地域社会との交流と産学官連携研究の推進を目的に、初回の二〇一二年（名古屋電気学園百周年）から隔年で開催を続けています。三回目となった今年も、総合技術研究所・三研究センター、大学院二研究科、大学三学部七学科十四専攻で取り組んでいる研究から生まれた技術シーズをブース展示し、講演会のほかにロボットミュージアムの見学会も行いました。



特別講演を行う藤村俊夫教授

講演会は、一号館三階メディア視聴覚室で二つの特別講演があり、まず本学OBの松本洋・豊田自動織機常務役員が「モータースポーツの夢」と題して講演しました。エンジン開発などの傍ら自動車競技に携わり、二〇一〇年にFIAフォーミュラワン日本グランプリ競技長に就任している松本氏は、「楽しむ」「極める」「支える」の三つの観点から解説し、トヨタグループ創始者・豊田佐吉翁ら先人の言葉も紹介して夢を追う大切さについて語りました。

続いて、トヨタ自動車で長年エンジンの設計開発に携わった本学機械学科の藤村俊夫教授が「自動車の未来―エンジン技術/自動運転技術の将来は？」と題し、環境問題を背景とする次世代自動車の技術革新や、インフラと協調して進化する自動運転の将来について解説しました。「自動車はIT、ITS、AI、IoTとリンクしながら新たな進化を遂げる」と述べる一方で、走る楽しさの追求はこれからも変わらないと結びました。

三〇三室では工学部、情報科学部の教授ら五人が技術シーズの話題を提供する講演があり、鳥井昭宏電気学科教授が「フレキシブルマイクロメカトロニクスのためのアクチュエータ」、手嶋紀雄応用化学学科教授が「流れ分析法による溶液ハンドリングの自動化と環境・臨床分析への応用」、呉承寧土木工学科教授が「産業副産物のフェロニツケルスラグ骨材を用いたコンクリートの特性」、鈴木敏志建築学科講師が「免震構造を対象とした構造安全性への取り組み」、北坂孝幸情報科学科准教授が「開腹手術映像の知的アーカイブシステムの開発」と題して順次講演。企業関係者らが熱心に聴き入りました。



研究成果を発表する院生

新エネルギー技術開拓拠点若手シンポジウムで発表
本学が昨年度から立ち上げたプロジェクト「グリーンエネルギーのための複合電力技術開拓（新エネルギー技術開拓拠点）」の研究成果を院生たちが報告する若手シンポジウムが十一月二十五日、八草キャンパス一号館メディア視聴覚室で開かれました。総合技術研究所の澤木宣彦所長の挨拶、プロジェクトリーダーの雪田和人・工学部電気学科教授によるプロジェクトの概要説明に続き、招待講演として、中部電力技術開発本部電力技術研究所の堀出昭彦所長が「電力系統における蓄電設備の役割と今後の展望」と題して話をしました。



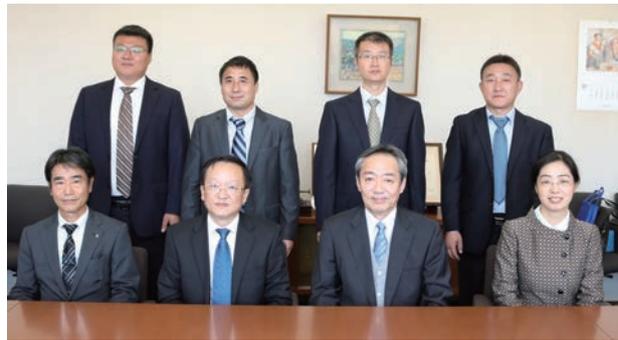
後藤理事長から保護者に手渡された奨学金

堀出所長は、再生可能エネルギーの導入拡大に必要な不可欠な蓄電技術のさまざまな適用例などを説明し、聴講者と活発に質疑が行われました。

若手の発表では電気電子工学、材料化学、電気・材料工学各専攻の院生たち十四人が、システム面と材料デバイス面の双方から取り組んでいるエネルギーの有効活用とエネルギーデバイス開発の成果について、実験内容を基に熱心に報告しました。

後藤すゞ子先生奨学金交付
学園が制定する「後藤すゞ子先生奨学金」が十月十八日、工学部の学生に交付されました。奨学金は元学園長の後藤すゞ子先生の遺志に基づいて設けられ、親の死去など思いがけない理由で学資の負担が難しくなった設置校の学生、生徒が学業を継続できるよう支援するものです。交付は八草キャンパス本部棟で行われ、学園、大学の幹部が立ち会いました。後藤泰之理事長が奨学金の趣旨を説明して保護者に手渡し、学生に「卒業までしっかりと勉強に励んでください」と励ましの言葉をかけました。

東南大から代表団



後藤泰之学長らと訪日代表団の皆さん

中国の東南大学から易紅・校務委員会主任を団長とする教員ら六人の訪日代表団が十月二十日、八草キャンパスを訪れました。後藤泰之学長が本部棟で出迎え、山田英介副学長も同席して歓迎の懇談がありました。後藤学長が「今後両校の学生を第一に置いた交流計画を念頭に、友好を深めていきたい」と挨拶し、易主任も「三十六年の歳月の中で培った成果の上に、さらに協力関係を築いていきたいと思います」と応えました。懇談の中で、共同学

「さらなる友好を」

位プログラムを言葉の壁を超えて効果的に推進するための方策や、東南大学が経営する成賢学院（大学）から愛工大への留学生受け入れなどについて話し合い、後藤学長は「とにかくやってみて、そこから明らかにした問題を解決していきましょう」と呼び掛けました。

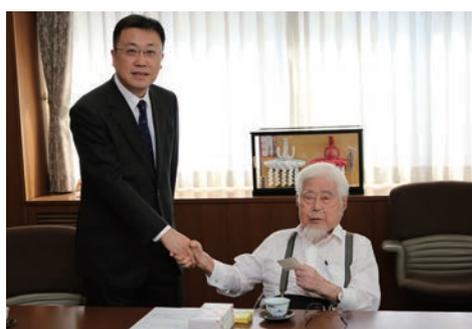
この後、二人の教授が電気、機械の特別講義を行い、易主任らは新二号館のロボットミュージアムなどを見学しました。一行は十八日に来日し、本学のほか東京や神戸、大阪などにも足を延ばして二十二日に帰国しました。

新総領事が就任の挨拶

第四代の中国駐名古屋総領事として着任した鄧偉総領事が十月十八日、愛知県日中友好協会の後藤淳会長（名古屋電気学園総長）を八草キャンパス本部棟に訪ねました。

鄧総領事と後藤会長は、初代学園理事長の故後藤鉦二先生が尽力したピンポン外交や、愛工大と中国・東南大との三十六年になる姉妹校提携などの歴史を振り返りながら、和やかに歓談。後藤会長が「歴史は順番に変わっていきますが、お付き合いは変わりませぬ」と語りかけると、鄧総領事は「後藤先生たちが頑張ったこられた日中友好の伝統

を若い世代で引き継ぎ、さらに良い時代を迎えられるように」と笑顔で答えていました。鄧総領事は駐日大使館勤務や駐大阪副総領事などを経て二〇一四年十一月から駐長崎総領事を務め、十月十六日に駐名古屋総領事に着任しました。



後藤会長に就任の挨拶をする鄧偉総領事

女子ら教員採用試験に合格

本学教職課程の学部生と院生、今春卒業生の計四人が今年度の公・私立高校教員採用試験に合格しました。今春卒業生の二人は工業高校教員として本学から待望の女子合格者です。合格者は三重県私立高校教員（情報）に情報科学科四年の丹羽巧さん、愛知県私立高校教員（電気）と岐阜県立高校教員（同）に大学院工学研究科博士前期課程二年の水嶋大輔さん、愛知県立高校教員（機械）に機械学科卒業の城旗優さん、岐阜県立高校教員（デザイン）に建築学科卒業の直井美のりさん。城旗さんと直井さんは工業高校講師として新たな生活を始めています。

◆秋の叙勲が十一月三日に発表され、学園事務局管理部長などを務めた松原暁美・県卓球協会副会長兼理事がスポーツ振興功勞を受章しました。同日付の中日新聞市民版に掲載された記事を同社の許諾を得て転載します。



スポーツ振興功勞
元県体育協会理事

松原 暁美さん(71)

地域のクラブ育てる

二〇〇一年から十四年間、県体育協会理事として、地域のスポーツクラブの育成やホーとして「卓球は強いボールを打つても勝てない。ミスを誘うなど相手との駆け引きが面白く、環境を整えることが大切」と強調する。（名東区勢子坊）

旭日双光章

名電高の松山、木造選手が世界ジュニア卓球で団体V
松山選手は混合ダブルスも銀メダル

十八歳以下で争う世界ジュニア卓球選手権（十一月三十日～十二月七日、南アフリカ・ケープタウン）の男子団体で、名電高校の松山祐季選手（三年）と木造勇人選手（二年）が、日本勢として十一大会ぶりとなる金メダルに輝きました。



アベック優勝した男女の選手たち

松山選手は、早田ひな選手と組んだ混合ダブルスでも激戦となった決勝の末に銀メダルを獲得しました。

十二月三日の男子団体決勝では、十連覇中の中国を準決勝で破っている韓国と対戦しました。一番に起用された木造選手が3-1で、予選から活躍が際立った三番の松山選手も3-0で相手を下す



決勝の1番手で先制した木造選手

など、韓国に三連勝して頂点に。インターハイ完全制覇で見せた名電の勝ちきる姿勢を世界の舞台でも発揮しました。

男子団体での日本の優勝は、水谷隼選手らが出場した〇五年のリンツ大会以来。今大会では女子とともに団体アベック優勝を成し遂げるなど日本勢の活躍が著しく、四年後の東京五輪に向けた新世代の台頭を強く印象付けました。



優勝を決めた松山選手
(いずれも ITTF 提供)

高校吹奏楽部が全日本マーチングコンテストで金賞
全日本吹奏楽コンクールでも銀賞の名演

高校吹奏楽部は十一月二十日に大阪市の大阪城ホールで開かれた第二十九回全日本マーチングコンテストに出場し、五年ぶり七回目の金賞に輝きました。

十月十五日に長野市で開かれた第三十回東海マーチングコンテストで金賞・朝日新聞社賞を獲得、東海支部代表として出場しました。演奏曲はフィリップ・スパークの「ドラゴンの年」。十字形から次々と隊形を組み替えてゆく迫力の演奏を披露し、会場から大きな拍手が贈られました。

また十月二十三日に名古屋国際会議場で開かれた第六十四回全日本吹奏楽コンクールに東海支部代表として三十九回目の出場を果たし、銀賞に輝きました。自由曲には交響詩「モントニヤールの詩」を選び、顧問の伊藤宏樹教諭の指揮により、アルプスの厳しい自然や人々の営みを表す曲を壮大なスケールで奏でました。演奏が終わると同時に「ブラボー」の声援と大喝采が起こる名演でした。

昨年にCD「ブラバン！」

名電」を発表して話題をまいた同部は、さまざまな場で演奏機会が増えていきます。九月二十四、二十五日には名古屋市の枇杷島スポーツセンターで開かれた男子プロバスケットボールB2リーグ「豊通ファイティングイーグルス名古屋」の開幕節二試合のハーフタイムに出演、軽快な振り付けを交えた演奏でブラバンの魅力をアピールしました。



B2リーグのハーフタイムで演奏する名電高吹奏楽部

多元ナノ構造解析システム
大学総合技術研究所は文部科学省の補助に採択された「多元ナノ構造解析システム」（透過型電子顕微鏡）を設置、使用環境が整ったのを踏まえて十月十三日に見学会を実施しました。システムは、材料科学



の世界標準となつている200kV透過電子顕微鏡である日本電子製のJEM-2100Plus型をベースに構築されています。最新の大口径X線検出器を装備して高感度成分分析が可能であることに加え、高感度カメラや多数の検出器の制御が64ビット版Windowsに統合され、操作性が大幅に向上していることが大きな特徴です。炭素触媒、セラミックス微粒子、半導体構造の分析評価に利用されます。システムは光機能性薄膜作成・評価室に設置され、見学会では総研の澤木宣彦所長が機種選定の理由などを述べた後、ナノデバイス研究室の岩田博之准教授が実機を用いて操作方法などを説明しました。写真。

「トヨタの働き方を進化させる自工程完結」 佐々木眞一愛名会会長（トヨタ自動車顧問・技監）が講演

名古屋電気学園愛名会と中部産業連盟主催の講演会が十一月十四日、名古屋国際ホテルで開かれ、愛名会会長であるトヨタ自動車の佐々木眞一顧問・技監が「トヨタの働き方を進化させる自工程完結」全社改革を推進するリーダーシップと哲学」と題して約一時間の講演をしました。

講演会には約四百人が参加し、佐々木会長、小川勝美・中産連専務理事のあいさつの後、トヨタ自動車で一貫して品質管理に取り組んできた佐々木会長が、一般には耳慣れない言葉の「自工程完結」について、長年の実務経験を交えて解説しました。

「自工程完結」とは、トヨタ自動車が二〇〇七年に推進組織を設立し、全社で



講演する佐々木眞一会長
(トヨタ自動車顧問・技監)

取り組んでいる仕事の進め方を指します。佐々木会長は「誰も悪いことをしていないのに起きてしまう理不尽な失敗を無くすため」と、その考えを生み出すに至った動機を語りました。

トヨタ自動車には「品質は工程で造りこむ」という創業以来の伝統があり、加工精度に人間の感覚が追いついていた時代と異なり、工程のブラックボックス化が進む中で、作業者の心がけと実際のパフォーマンスが一致しなくなり、検査や選別に頼る工程運営が見られるようになった」と背景を説明しました。

自身の体験の中から「ホイールアライメントのキャンバー角の不具合」「プロペラシャフトの共振によるこもり音発生」「英国拠点・TMUKの作業者のモチベーション低下」「堺工場での水漏れゼロ活動」を例に挙げ、失敗を克服してきた道筋を解説。「自工程で悪い物を造ってしまったり、

異常が起きたりした場合、単なるお題目や心掛けでなく、物理的、科学的、論理的に直ちに止められるシステムになっていることを自工程完結と言う」と語りました。

これらを踏まえ、スタッフ職場での自工程完結の展開へと話を進め「産業の現場力は海外の一流企業と比べても日本の中小企業の方が勝っている場合が多いが、その一方で頭脳労働者、いわゆるホワイトカラーの生産性は低いといわざるを得ない」と、日本企業の国際競争力低下の理由をホワイトカラーの仕事の進め方に求めました。

「スタッフ部門の仕事は変化への対応であり、正しい目的・目標を確認したうえで達成までの最適プロセスを設計しなければならぬ。そのためにはプロセスを要素作業のレベルまで細分化し、意思決定に必要な良品条件（必要なもの）を紐付ける必要がある」と結論付けました。さらに、部下のチャレンジ精神を引き出すためのリーダーの役割の大切さについても説きました。



パネル展示による発表

AIエンジニア大賞

本学が制定するAIエンジニア大賞の研究発表会が十一月五日、八草キャンパスで開かれました。愛知、岐阜、三重、静岡、長野各県の高校生に呼び掛けて論文・作品を募集、成果を顕彰しており今年で十五回目。理系人気の高まりを受けて年々エントリーが増え、今回は「自然科学」「ものづくり」「社会科学・地域づくり」の三部門を合わせて延べ四十九校から過去最多の五十八テーマの研究発表が提出されました。午前中は部門別のステージ発表があり、チームを組んだ生徒たちがテーマにつき五分の持ち時間でプレゼンテーション。午後はパネル展示による発表で、さらに詳しい説明を行いました。パネル展示の会場では高校生同士が質問し合ったり、交流と理解を深めました。

内田臣一教授（土木工学科）渡辺修教授（機械学科）田村隆善教授（経営学科）ら本学の専門教員二十四人が委員となり、発表内容の獨創性や工夫などを審査した結果、次の学校・テーマが優秀賞を受賞しました。

【自然科学】愛知県立刈谷高校「シャトルコックの劣化が飛行にもたらす影響」、愛知県立明和高校「竹とんぼの羽と軸のバランスについて」、岐阜県立岐阜高校「守れ！ふるさとのカスミサンショウウオⅧ〜環境DNAとGISを用いた新規生息地の発見〜」【ものづくり】愛知県立岡崎工業高校「設計技術から学ぶ小型ガラ紡績機の製作」、愛知工業大学名電高校「可動式太陽光パネル及び、水質浄化システムの研究・開発」、愛知県立瑞陵高校「はたらけ！ドロ電池☆シ」【社会科学・地域づくり】岐阜県立岐山高校「カワニナを通して考える地域の生態系」、名古屋市立名古屋商業高校「学生がつながったコミュニティで作る新しい街づくり」、愛知県立豊橋東高校「東三河ジオパークに行こう」

あいぼう会が内閣総理大臣表彰



表彰状を手にする横田崇・地域防災研究センター長

本学の地域防災研究センターが運営をサポートする企業防災ネットワーク「地震に強いものづくり地域」が、防災思想の普及と地域防災力の向上に貢献したとして、平成二十八年度防災功労者内閣

総理大臣表彰を受けました。十二月で結成十周年を迎えた「あいぼう会」は、日本有数の産業集積地域である愛知県の企

業を中心に四十四団体が会員となり、地元商工会議所や愛知県などからなる専門委員、アドバイザーを交え、全国でも珍しい産官学の連携活動により企業防災力の向上を目指しています。これに先立ち、会は今年三月にも「消防庁第二十回防災

まちづくり大賞 消防庁長官表彰」を受けています。

あいぼう会では、これまで十年間の歩みを基盤に、今年度も勉強会や分科会活動に意欲的に取り組んでいます。会長を務める横田崇・地域防災研究センター長は

「掛け声だけでは、企業同士や地域との連携をはかるのは難しい。新たなテーマとして確かな連携体制づくりを掲げ、いざ被災した際、人も地域も企業も生き抜いていける地域と企業の防災力向上の研究を進めたい」と話しています。

吉村真晴選手が銀メダルを報告



活躍を誓う吉村真晴選手

リオ五輪卓球男子団体で銀メダルを獲得した卒業生で名古屋ダイハツ所属の吉村真晴選手（本年三月経営学部卒業）が九月十五日に八草キャンパスを訪れ、快挙の報告をしました。

銀メダルを首に掛けた吉村選手は、後輩の卓球部員や教職員ら百人の拍手に迎えられました。花束を贈られ、後藤泰之理事長から「東京五輪でさらに一つ上のメダルを」、辻本昌孝・クラブ活動後援会副会長から「活躍する姿を後輩に見せ続けて」と、祝福と激励の挨拶を受けました。

「子供のころからの夢をかなえて帰ってきました」と、卒業から半年ぶりの母校で切り出した吉村選手は「五輪の試合会場に立った

瞬間『目指してきた場所がここで良かった』と幸福を感じました」と率直な感想を披露。「やりたいことを貫いてこられて本当に幸せ者だと思う一方、今の結果に満足していない自分がい

ます。四年後の東京五輪で、さらに高い壁を乗り越えたい」と力強く誓いました。九月一日に交際相手の女性と入籍した吉村選手は、会場からの質問に答え「支えられ、支えなければならぬパワーにしています」と笑顔で報告しました。

クリーンエネルギーで中国の若手研究者と交流

中国・南京工程学院でエネルギー・動力を研究する若手教員と大学院生たちが十一月六〜十三日の日程で来日し、クリーンエネルギーの利用をテーマに愛知工業大学と交流しました。

一行は、同学院クリーンエネルギー研究所長の譚文軼教授ら九人。大気汚染が進みクリーンエネルギーへの転換が急がれる中国の現状を踏まえて本学電気学科との科学技術交流を希望し、教え子を通じて要請を



京大大学院の佐川尚教授（左端）を招いて開いたシンポジウム

十日は八草キャンパス新二号館で「クリーンエネルギーシンポジウム」を催し、本学電気学科からは森竜雄教授、雪田和人教授らが参加しました。午前は双方のプレゼンテーションがあり、午後は京都大学大学院エネルギー科学研究科の佐川尚教授の招待講演「クリーンエネルギー技術の将来像」を行った後、総合デバイスカシオンで活発に意見交換しました。

滞在中、一行は本山、自由ヶ丘両キャンパスでも学部横断的な交流を行ったほか、本学のエコエネルギーセンター、総合技術研究所、地域防災研究センター、耐震実験センターなどを見学し、学内研究者とのフリーディスカッションに意欲的に取り組みました。

自由ヶ丘で「花まちプロジェクト」始動



店舗前に花を運ぶ学生たち

がある自由ヶ丘地区を花で彩る「花まちプロジェクト」に取り組みました。

経営学科経営情報システム専攻のI.T経営研究室(石井成美教授)で学ぶ学生たち十八人が十二月二日、名古屋商業高校の生徒と力を合わせ、キャンパス

どりのピオラの花が咲いた計八十個のプランターを用意。プランターの上(花の背後)には、地元の自由ヶ丘小学校児童が思い思いに描いた絵を飾りました。

本学と同高が連携して取り組んでいる地域共創活動の一環で、黄、白、紫など色とり

この日は「自由ヶ丘のお店や商品を知ってもらおう」と、同高の生徒たち十六人も参加して自分たちが企画したショッピングイベントを繰り広げました。

地元商店街「自由ヶ丘プラザ」の各店舗前にプランターを運び、お店の人に水やりの管理をお願いしました。今後も季節に応じて花の配布を続ける予定とい

学園と全設置校挙げて防災訓練



消火訓練(八草キャンパス)

学園と全設置校を挙げての防災訓練が今年も十一月二日、教職員と学生・生徒の総勢約五千八百人が参加して繰り広げられました。訓練は午前十一時四十分五十五秒、紀伊半島沖を

や生徒たちは机の下に隠れるなどした後、一斉に避難先に向かいました。八草キャンパスでは五号館実験棟が崩落、同棟南側が一部通行困難との想定で、担当者らが救護活動な

震源とするM8.5の東海・東南海連動型巨大地震が発生したとの想定で始まりました。緊急地震速報のサイレンとともに「地震が来ます」の放送が各設置校に流れ、授業中の学生

ど被害拡大の防止に努めました。避難場所のサッカー場では学生が消火訓練に取り組みました。設置校の名電高校、附属中学校、専門学校でも同時刻に連動して訓練を行いました。



グラウンドに避難した生徒(高校)

名電高校社会科教諭・相撲部監督の澤田勉先生が死去。愛工大名電高校の相撲部監督を長く務め、大相撲の元幕内朝乃若(現若松親方)や元幕内武雄山(現山分親方)らを育てた同校社会科教諭の澤田勉先生が十月一日死去しました。六十三歳でした。十月一日開幕した岩手国体に相撲部を率いて出場し、通算三十回以上出場の表彰を受けるなどしましたが、岩手県花巻市内で体調不良を訴えて帰らぬ人となりました。

澤田先生は昭和五十二年。通夜は十月三日、告別式は十月四日、名古屋市内で営まれ、学園や相撲競技の関係者、岩手国体の試合を終えた相撲部員などの教え子ら多数が参列しました。

豊田市民美術展で市長賞と市教育委員会賞を受賞



専門学校情報工学科DTP・Webデザインコースの二年生二人が豊田市民美術展グラフィックデザインの部で豊田市長賞と豊田市教育委員会賞を受賞し

ました。作品はいずれもポスターで、豊田市長賞に木戸亮太さんの「刈谷万燈祭」II写真⑥、豊田市教育委員会賞に荒武彩音さんの「大須花魁道中」II同⑦IIがそれぞれ選ばれました。木戸さんは昨年の審査員特別賞に続き二度目の受賞です。「万燈」は、竹と和紙で歌舞伎絵や武者をかたどった張子人形を色鮮やかに彩色したものの。「若衆が一人で万燈を担ぎ、お囃子に合わせて舞う祭りの迫力を表現しました。受賞は制作の励みになります」と喜びを話しています。